書評

栗田和明著『マラウィを知るための四五章』を読む
― 地誌記述との関連で ―

大塚直樹

『マラウィを知るための四五章』は、明石書店の「エリア・スタディーズ」シリーズの一冊として、二〇〇四年二月に出版された。同シリーズは、一九九八年十一月から刊行され始め、二〇〇四年六月現在、計四〇冊が出版された。それぞれの著書のタイトルをみると、①一国ないし特定の地域を対象とした書、②一国の特定の時期ないし特定のテーマに焦点を絞った書、③国を越えたより広範な地域を扱った書に分類できる。このような取り扱う地域の規模やそのテーマの違いは、地域研究というタームの多様な解釈を反映した結果であろう。

また、「エリア・スタディーズ」シリーズは、単著と共著(編著)に分けられる。この意味において、『マラウィを知るための四五章』は、前述①の単著として位置づけられる。[1]

著者は、一九九〇年の年末に初めてマラウィに足を踏み入れた。その後、二〇〇〇年から二〇〇一年にかけてマラウィ大学に所属し、長期滞在した経験を含め、十数年間にわたり当該地域とかかわりをもってきた。本書は、これまで著者がマラウィで実施してきた長短期のフィールド調査の集大成といえよう。

はじめに『マラウィを知るための四五章』の全体を概観してみよう。

本書はⅦ部四五章からなる。[2]第Ⅰ部「国全体の姿」(第一～五章)および第Ⅱ部「歴史をたどって」(第六～九章)では、マラウィの地理的・歴史的背景が描かれている。第Ⅲ部「産業」(第一〇～一五章)では、農業、特に主要な外貨獲得の手段である換金作物のタバコとチャ生産の現状が記述されている。そのほかに、マラウィの国土面積の約四割を占めるマラウィ湖における漁業が紹介されている。

第Ⅳ部「各地の様子」(第一六～二一章)では、マラウィの首都および旧首都などを中心に七つの都市の様子について、その開発の歴史と合わせて列記されている。南北に長い形状をもつマラウィの都市開発は、南部を中心に進められている。事実、首都、旧首都および最大の人口を有する都市の三都市がすべて南部地域に集中している。第Ⅴ部「生活の基盤」(第二二～二八章)では、電気、水道などインフ

ラ整備、教育の実情が具体的な事例とともに記述されている。つづく第Ⅵ部「毎日の生活」(第二九～三四章)では、第Ⅴ部「生活の基盤」の記述に基づき、人々の日常生活の様子が描かれている。ここで取り上げられているのは、衣食、健康、治安などについてである。

第Ⅶ部「他国との関係」(第三五～四五章)では、人の移動・交流、交易、外交など、他地域とのさまざまな関係が歴史的、政治的な変化のなかに位置づけられている。最終章である第四五章は、資金援助(ＯＤＡ)や人的な援助(青年海外協力隊)などを通じた日本との関係が言及されている。

以上が本書全体の概観である。評者は、著者と異なる地域を対象に研究を進めており、本書のマラウィに関する具体的な記述内容やその文脈を評価する立場にはない。ここでは、著者が本書を執筆にあたり配慮した点を紹介しつつ、議論してみよう。

著者が本書の執筆にあたり心がけたのは、以下の三点である。それぞれ、①「マラウィとその周辺の関係を示す」、②「比較して分かる」、③「具体的な事象を示す」である[五-六][3]。①「マラウィとその周辺の関係を示す」は、著者のもうひとつのフィールドであるタンザニアとの関係を中心に記述されている。特に、著者は人とモノの移動に注目し、周辺との関係を示そうと試みている。マラウィでは、人の移動が恒常的に行われてきた。人の移動を容易にした理由のひとつには、マラウィの地理的位置が関係している。内陸国であるマラウィは、その国境が陸続きであり、島国と比較して容易に移動が行えるという側面をもつ[第一章、第三五章]。さらに、著者は、「あらゆる機会に人々は移動し拡散していくのが当然で、特別な時にそれが止まる、と考えたほうがいいのかもしれない」[三二]と指摘している。

二〇世紀以降、アフリカのほとんどの地域が植民地化されると、鉱物資源が少ないマラウィは、東・南部アフリカに鉱山労働力を提供する拠点となった。結果として、男性たちは出稼ぎを繰り返していた。マラウィでは、鉱山労働者あつめの事務所が開設され、労働者を汽車、バス、飛行機で鉱山まで輸送する体制が整っていた[二二九]。

このような移出する人々に対して、移入してきた人々がいる。たとえば、何世代も前に入植してきたヨーロッパや南・西アジア出身者は、現在、農場経営や都市で商店、スーパーマーケット、ガソリンスタンドなどの経営をしている。さらに、植民地期との関連では、冒険ないし入植を目的とした植民地主義者による名づけが現在の当該地域における言語ならびに民族の分類を複層化させている点が描かれている[第四章]。

また、マラウィの北で国境を接するタンザニアとの交易が注目されている［第四〇-四一章］。マラウィとタンザニアとの国境を流れるソングウェ川には、橋のほかに船着場がある。この船着場が税関を通過しない交易の中継地点となっている。交易されるモノは、米、砂糖、ビール、トウモロコシなどであり、税関の役人の動向など、その時々の情勢判断により変化している。現地住民は、丸木舟に自転車とともに乗り込んでさまざまな荷物を運び、それを対岸で売って現金収入を得ている。このような活動は、そのまま国境を挟んだ両地域の需要と供給、生産物や売買されるものの違いを反映している。これらの交易は、比較的小規模に行われ、マラウィという国全体の貿易額（量）からみれば、絶対的に規模が小さい。しかし、実際にこれらの経済活動は、それに従事する人々の貴重な現金収入の糧になっており、人やモノの交流という点で見逃すことができない。また、非合法ともいえる国境を挟んだ交易には、罰金を課せられる危険性を考慮しながら行動する現地住民の生活戦略の一端が見え隠れしている。

さらに、現地の人々の交流では、ダンスが取り上げられている［第四二-四三章］。本書で取り上げられているダンスは、その起源を植民地時代の宗主国の軍楽隊に求められ、レクリエーションの性格が強い。マラウィ―タンザニア間では、このようなダンスによる交流が相互に招待しあう形式で定期的に行われている。レクリエーションとしてのダンスは、植民地時代の支配―被支配という一枚岩的で単純な構造では捉えられない事例を提供している。

以上のように、「マラウィとの周辺の関係を示す」という点は、人々の移動・交流を通じて生き生きと描かれている。また、著者の掲げる③「具体的な事象を示す」という実践が記述をより興味深いものにしている。具体的な事象という点でみると、現地の給料の相場とともに提示されている電気・水道などの使用料金のデータは、現地に長期滞在（生活）した実感が伝わってくる［第二二-二三章］。

次に、②「比較して分かる」という点は、著者が「適切な比較材料を提供することは存外難しい」［五］と認めているように、必ずしも成功していない。確かに、日本のインフラ整備との比較や円との換金レートなどの例は、読み手の想像力を喚起しやすい。しかし、読み手によって経験されていない比較材料は、記述内容のより深い理解を促すものではない。特に、数字による比較の場合、提示する数字の意味やその背景を明示する必要があろう。ただし、評者は、比較視点の有効性を否定しているわけでない。比較の手法を用いて記述を進める場合には、提示する比較材料に細心の注意を払う必要がある。

また、著者は、「自分自身が住んでいる地域の気候、人口、物価、人間関係などについて、私たちは具体的な感覚を持っており、それらと比較して記述を進めることによって、外国地誌と呼ばれる分野の記述が親しいものになる」[五]と示唆している。しかし、地誌を記述するという点では、近年、より根本的な問題の存在が指摘されている。

熊谷によれば、現在の地誌は、教育現場における教材としても、その地域についてより深い知識や理解を得たいという読者にとっても中途半端なものになっている。そのような地誌が再生産され続ける理由には、以下の三点がある。それぞれ、①地域に関して総合的に記述した書物が地誌であると考えられ、その地誌が分担執筆の場合、各執筆者間の記述内容に有機的な結びつきが感じられないこと、②地理学者によって書かれたものこそが地誌であると考えられてきたこと、これと関連して、③地理学者であれば、その地域に特別通じていなくとも地誌（少なくともその一部）は書けるとされてきたこと、である。[5]

熊谷は、地誌を記述する前提条件として、その地域に対する深い理解および自らの認識論・方法論的な（再）吟味の必要性を指摘しているように思われる。これは、特に外国地誌の記述を論じる場合にあてはまる。「他者」が生活する外国について記述する場合、自らがその地域をどのように認識し、また理解するか、が問われる。自らが従来もっている具体的な感覚や経験は、異文化のなかで通用しないことが多い。しかし、そのような地域について、事実を記載するのみであれば、その記述は単なる相対主義に還元されてしまう。

「地域に対する理解を深める」という点において、地域研究（area studies）の手法が一つの手段を提供できる。地域研究は、一九三〇年代からアメリカで注目されるようになり、第二次世界大戦前後を通じて発展してきた。ただし、地理学内部では、地域研究というタームについて必ずしもコンセンサスが得られていないようである。[6]ここでは、アメリカの地理学者であるR・ホールに注目してみよう。[7]

R・ホールによれば、地域研究は、社会科学分野の諸学問間の相互作用、交流をもたらし、また社会・自然・人文それぞれの学問分野のギャップを埋める役割を果たす可能性をもつ。それを達成するために、まず、当該地域の語学を習得することを条件としている。語学の習得は、それ自体を目的とするのではなく、目的を達成する手段として行われる。語学の習得を必要とするという点から、R・ホールのいう地域研究は、自らの属する社会とは異なる社会の研究に重きが置かれていることがわかる。

しかし、地域研究の目的は、語学の習得のみ、または一つの学問分野のみでは達成されない。地域研究では、対象地域を総合的に理解する姿勢が求められる。地域の総合的な理解の背景には、その地域に赴き、一次データ・資料を収集する必要性が示唆されている。さらに、R・ホールは、自らの文化・伝統を深く知ることで、他の地域をより深く理解できると指摘している。

以上、R・ホールの指摘を簡単に紹介した。ここから、地域研究は、外国を主たる対象地域とした既存の学問分野横断的、すなわち学際的な研究であり、当該地域の語学習得およびインテンシブなフィールド調査に基づくもの、と要約できる。R・ホールの著書は、第二次世界大戦直後の一九四七年に発表された。しかし、前述の熊谷による地誌の現状に関する指摘を省みると、現在でも注目に値する点が多い。[8]

最後に、以上のような議論との関連で『マラウィを知るための四五章』に関する若干の検討を試みたい。

本書の冒頭部分で、著者は、「本書で取り扱っている内容、章の配列などはオーソドックスな地誌学、あるいは地域研究のものである。しかしこれらをどう解釈して、説明するかは必ずしもオーソドックスな方法によっていない」[六]と解説している。ここで、地誌と地域研究が同列に扱われている理由は定かではない。ただ、地誌の記述という点に限ってみると、部の構成には、自然環境の全般的な記述から始めて、歴史、経済、社会、文化などの諸側面を書き連ねるという、地誌の網羅的な記述の特徴が現れている。具体的な記述では、個々の事象がマラウィ全体やグローバルな状況のなかに位置づけられて議論されている。そうすることで、空間的に異なるスケール間の相互作用を意識した記述が試みられている。さらに、著者の長期フィールド調査の経験ないし長期滞在時における体験が本書のさまざまな箇所に挿入されていて、読み手の関心を集める。

また、前述のように、本書は単著であり、各章間の有機的な関連がみられる。特に、植民地時代を中心とした歴史的な出来事やその変化の過程が現代的な事象のなかで文脈化されている点で評価できる。たとえば、前述した人とモノの移動や南アフリカや台湾などとの外交関係を、マラウィの政権交代や周辺諸国の政治的な状況の変化のなかで論じつつ、さらに、そのような変化のなかで生活するマラウィの人々の日常を描いている点などが挙げられる。

以上から、評者には、本書が前述の熊谷の批判をある程度克服しているという点で、地誌記述の一つの可能性を提示しているように思える。[9] ただ、マラウィ地誌として読ま

れるかどうかは別として、本書の最終的な評価は、マラウィないし、より広くアフリカを知りたい、当該地域の知識を得たいと考えている読者に委ねたい。

注および引用文献

(1) ただし、第二八章は、寄稿者により執筆されている。

(2) このほかに、本書には、全九本のコラムが挿入されている。

(3) カッコ内は『マラウィを知るための四五章』からの引用ページ数を示す。以下、特に断りのない限り、四角カッコは同書からの引用ページないし該当する章とする。

(4) 人の移動との関連で、「わたしたち自身の見方・考え方が世界中を移動する人々の力によってつくり出されてきた」というスピヴァクの指摘は興味深い（スピヴァク、G・C〔上村忠男・鈴木聡訳〕『ある学問の死：惑星思考の比較文学へ』、みすず書房、二〇〇四年）、三―六頁。

(5) 詳しくは、熊谷圭知「第三世界の地域研究と地誌学：その課題と可能性」『地誌研年報』五号、一九九六年、三五―四五頁、を参照のこと。熊谷論文のタイトルから分かるように、本文中の三点は、主として第三世界を記述する地誌について指摘されている。また、地誌全般に関する議論では、応地利明「地誌研究と地域研究：認識論的ノート」西川治編『地理学概論』総観地理学講座一、朝倉書店、一九九六年、二二九―二四九頁、ならびに西川大二郎「地域研究と地誌を結ぶもの：再び地誌学を検討する」熊谷圭知・西川大二郎編『第三世界を描く地誌：ローカルからグローバルへ』古今書院、二〇〇〇年、二三一―二五六頁も参照のこと。

(6) たとえば、二〇〇三年に人文地理学シリーズの一冊として出版された『地域研究』では、それぞれの分担執筆者により、地域研究という用語の定義や使用方法が異なっている（村山祐司編『地域研究』シリーズ人文地理学二、朝倉書店、二〇〇三年）。

(7) 以下の記述は、主として Hall, R. *Area Studies: with special reference to their implications for research in the social sciences.* New York: Social Science Research Council, 1947, pp. 1-3, pp. 12-21, に依拠している。R・ホールは、〝シカゴ大学日本研究センター（Center for Japanese Studies）の初代所長を務めた。

(8) 地誌と地域研究について、その相互関係や有機的な結びつきの可能性を議論することは、大変興味深い。この点は、稿を改めて議論したい。さしあたり、前掲注（5）の文献を参照こと。また、地理学と地域研究については、熊谷圭知「地域研究と地理学：一九九〇年代後半における地理学者の研究の検討を中心に」『お茶の水地理』四四号、二〇〇四年、一―二六頁を参照のこと。

(9) 前掲注（5）の熊谷・西川編〔二〇〇〇〕は、地誌記述の革新を試みた論文集として位置づけられる。

（栗田和明著『マラウィを知るための四五章』エリア・スタディーズ、明石書店、二〇〇四年二月、二九五頁、定価：本体二〇〇〇円＋税。）

（本学文学研究科地理学専攻博士課程後期課程）